

難波西鶴と 海の道

【75】

森田 雅也

西鶴は、よく作品に筑前博多の「袖の湊」や「袖の浦」という語を用いています。前回、最もその地に

からよく詠まれました。「本歌に替はり」とは、そんな歌に詠まれた風光明媚な場所は過去の話となつてというような意味です。

前回、近世初頭にかつての貿易港「袖の湊」がなくならぬという記事を書きましたが、今は人家が建ち並び、魚を売る店が並んでいくというのです。私事ながら昔、沖縄の島に行った時、地元の人からこの辺りは自給自足で魚を捕るので「魚屋」がないのだと聞かされ、驚いた思い出があります。

先日、韓国の海辺でもそのよつた話を聞きましたが、「魚屋」が必要となるのは、

人家が建ち並び、漁師でない人が増えてきた証拠なのでしょう。

話としては、そのような「磯くさぎ風」を嫌い、精進潔斎して武道修行に励む「伊織」という若い世捨て人が主人公となつていきます。おそろしく、「磯くさぎ風」は単なる魚臭さだけではなく、人間のおいも含まれているのでしようね。

「定家机(文机)」に向かって、毎日、「二十一代集(『古今集』から『新続古今集』までの勅撰集)」を書写し、1人暮らしする

文学青年のもとに、ある夜突然、美しい女性が訪れてきます。もちろん、伊織にとつて見知らぬ女性でしたが、紫の下着をつけた美女は、自ら積極的に伊織をくどき、一夜で男女の仲になつてしまします。その仲は日々深まり、伊織も精進を捨てて夢中になつてしまします。

西鶴諸国ばなし「袖の湊」

そんなある日、偶然数少ない友人の医師に会ったところ、伊織の顔に死相が表れていると指摘されます。信じようとしていない伊織に、医師は、友人として付き合いなから、その死を救えなかつたと悪評がたつては世間体が悪いと絶交を申し渡します。ようやく目が覚めた伊織は、医師に相談すると、これこそ妖女(紫女)。

退治を勧められ、紫女に会った際、抜き打ちに切りつけ、負傷させます。逃げた後を追うと、狐穴があり、まぎに化け物。その後も紫女として、人々を苦しめますが、国中の宗教者でどうにか封じ込めま

す。この話、典拠は中国小説「剪燈新話」とか。人の人生を狂わす、キツネが化けた美しいお姉さん。実に怖いですね。
(関西学院大学文学部文
学言語学教授)

人生狂わす 妖女 紫女出現